

日本ミュージアム・マネージメント学会への期待

日本ミュージアム・マネージメント学会理事

八千代市歴史民俗資料館館長

島 津 晴 久

日本ミュージアム・マネージメント学会が平成8年3月に創立されてから、早いもので3回目の総会をむかえることとなった。創立時から多少参画した者として、学会の行く末をいささか心配していたが、この学会のもつ意義が博物館界などのあいだで賛同者を得て、徐々ではあるが会員数も増加しつつあり、まことによろこばしいことである。

さて、私は原稿をもとめられると、つい年齢のせいか自分の来し方を述べることが多い。「光陰矢の如し」という諺のとおり、早いもので私も馬齢を重ねて、すでに還暦をむかえてしまった。昭和36年から博物館界に籍をおいているが、今、過去とくらべてみると、博物館界を取り巻く環境はたいへんよくなってきたていると思う。私がこの世界に籍をおいたころからわが国の博物館界は建設推進の機運をむかえた。しかしながらこのころには、いまだ「博物館行き」という言葉が横行していた時期でもあった。一種の差別的な用語と思われる非常にいやな言葉であったが、これがその当時におけるわが国の博物館界のおかれた社会的な評価の一端であったとも考えられる。その後、全国各地の博物館の先輩たちが、それぞれの地域において、趣向をこらした活動を展開した努力の結果であろうか、この忌まわしい言葉もいつしか聞かれなくなつて、ほつとしている。

周知のとおり、現在、わが国の博物館界はオーソドックスなものから、特色をもつものまで、千差万別という言葉があてはまるほど、幅広い分野の施設が設置されつつある。まさに百花繚乱の時期をむかえたといつても過言ではあるまい。また、博物館界は生涯学習の中核的な存在であり、それに応えていくことの意義も大きいことと思われる。そして大衆から支持をうけられるようにしなければならないと思う。現在、行革の嵐のなかで、国公立の博物館では、なんらかの影響をうけそうな気配を感じるが、大衆の支持を得て、逆風をおしのけて博物館界は一層の隆盛へむかうことを期待する者である。現在、博物館の一部にはマンネリ化した個性のない画一的な運営をしているところもみうけられるが、早急に脱皮して欲しいものである。当学会では、博物館の運営方法を研究し、次世代の人々に共感をよぶ、博物館運営の理念と方法を創出したいものである。馬齢を重ねた私も、次世代を担う仲間たちと語らう機会をもつことのできる楽しさを心からよろこぶものである。



C · O · N · T · E · N · T · S

■日本ミュージアム・マネージメント学会への期待／日本ミュージアム・マネージメント学会理事 八千代市歴史民俗資料館館長 島津晴久	1
■ミュージアム文化研究部会／部会長・沖吉和祐	2
■理論構築研究部会／部会長・高安礼士	4
■事業戦略研究部会／幹事・斎藤恵理	6
■ソフトサービス研究部会／幹事・重盛恭一	8
■教育・コミュニケーション研究部会／幹事・石川 昇	9
■合同研究部会報告（1）／制度問題研究部会幹事・小川義和	10
■合同研究部会報告（2）／ミュージアムショップ研究部会・山田礼子 ソフトサービス研究部会幹事・重盛恭一	12
■書評／会員からのメッセージ	14
■研究部会の開催予定一覧 ■INFORMATION	16

ミュージアム文化研究部会

地域文化と大学博物館 ～ミュージアム文化研究部会報告にかえて～

1. 博物館運営の新しい流れ

最近、「博物館」の設置・運営に、いくつかの新しい流れが見える。

まず、第1に、『顔』のある博物館が計画されるようになつたことだ。特定のテーマのもとに構想がたてられ、準備が進められ、事業が展開される博物館が多くなってきた。公立の博物館では、兵庫県の「人と自然の博物館」が、そのきっかけだろう。テーマを持つ博物館は、特定の専門分野の学芸員や研究者を揃え、多量の標本・資料、情報の体系的な収集を可能にし、「テーマ」に関するネットワークセンターとして機能することになる。最近では、東京都の「江戸東京博物館」、神奈川県の「生命の星・地球博物館」、千葉県の「現代産業科学館」などがある。滋賀県の「琵琶湖博物館」は、滋賀県ならでは可能なテーマを追求している。企業の設置する博物館には、交通、エネルギー、情報通信などを扱った大規模な施設があり、近年、展示更新や新しい事業展開が試みられているが、「香りの博物館」(静岡)など小規模な中にユニークな味を持つ博物館が見られるようになつてきた。

第2の流れとして、『手』を広げる博物館があげられる。博物館としての「ハコモノ」の整備に止まらず、博物館を取り巻く地域全体を一体的に捉えて、地域ぐるみの博物館づくり、博物館運営が行われている。近江八幡市の「瓦ミュージアム」等は好例である。中小規模の自治体での取り組みが多く、静岡の本川根町では「音戯の郷」が開館し、下田市の「ハーバーミュージアム」は今秋着工する。このような博物館は、まちづくり、文化づくり、人(輪と和)づくりの拠点として大きな役割を果たしている。民間の博物館でも、「観音崎自然博物館」(神奈川・横須賀)、「佐原求一郎美術館」(北海道・帶広)などに、自然や文化を通して地域との関係を重視した新しい動きが感じられる。

この他、『感覚』に着目した「アミューズメント」博物館(博物館らしい施設)が増えているのも特徴である。最近開設する博物館には、実体験の場は必ず整備されている。

また、設置・運営の形態に変化が見られる。北海道の「開拓の村」は財団に、「小樽交通記念館」は会社に管理が委託されている。企業の博物館も、子会社や別企業、財団等が管理・運営を行うものが多くなっている。経済的な効率性とともに、柔軟で機動的な運営を目指しているものもあるが、一面で、「本来の設置者」との意思疎通に配慮することの必要性(困難さ)についての指摘がある。

こうした中で、私が特に注目しているのが、最近の大学の動きである。

2. 大学改革と大学の変貌

大学における教育は、従来のエリート対象から、マスエデュケーションに変わり、最近ではユニバーサル化が進んでいる。こうした中で、大学の機能が見直されている。

先ず、教育機能と研究機能の関係である。これまで、大学教官の大多数は『研究重視』であったが、最近、『教育重視』というごく当たり前のことが主張できるようになった。

また、大学の教官と学生を相手としてきた教育と研究の場を、地域に開放しようとの意識が高まっている。公開講座、施設開放、社会人入学など地域へのサービスを『第3の機能(生涯学習機能)』としてその拡充を図ろうということである。これもまた、至極当たり前のことで、本来、大学は地域の公共財であり、そこで行われる教育、研究は全て地域と共有すべきものなのである。

いざれにしても、教育・研究機能の強化、高度化、活性化を図り、古色蒼然たる大学を改革しようという最近の大学の動きは、喜ばしいことである。

私は、この際、『第3の機能』を拡充しようという動きを捉えて、大学そのものを『生涯学習機関化』できなかっただろうか、これこそ、本当の大学改革だと考えている。

その突破口となるのが、『大学博物館』である。

3. 大学の博物館の現状

大学は、大変な量の資料を持っている。因みに、昨年まで私が勤めていた北海道大学には、400万点を越す学術資料がある。資料の数え方にもよるが、この数は、全国の公共博物館が有する標本数を大きく上回る。全ての大学の資料の数はどれほどになるか、予測しがたいが、1億点を越すことは間違いないだろう。学術標本は、再現不可能な貴重な資料であるが、現状を見ると、多くは研究者個人が保管しており、分類・整理が未完了で第1次資料としても利用できないものがある。スタッフの交代により死蔵されたり、施設改修の時期に当たり、放置しておくと廃棄される運命にあるものもある。

海外旅行で欧米の大学を訪ねると、そこで立派な博物館に案内される。1683年に設置された世界最古の大学博物館を持つオックスフォード大学をはじめ、多くの著名大学は18世紀には大学博物館を持っていた。アメリカでも、大学により規模は違うがほとんどの大学に博物館が設置されている。ハーバード大学には、考古学・民族学博物館、比較動物学博物館、植物学博物館など素晴らしい博物館が整備されている。韓国の大学設置基準には、博物館の設置が大学に義務づけられている。

もちろん、我が国の大学にも博物館は作られてきた。秋田大学の鉱業博物館、東京農工大学の繊維博物館、早稲田大学の演劇博物館、明治大学の刑事博物館などはユニークな活動をしている。博物館と銘打つていなくても、ほとんどの大学で、資料館、記念館、陳列室などの形で資料を展示しているのだが、「博物館行き」的で、世に

知られていないものも多く、一般に利用される状況になつてない。

3. 大学博物館の提案

平成7年、学術審議会の学術資料部会が、「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」との中間報告を公表した。このなかで「学術標本は学術研究の基礎」と位置づけている。「自然人類学の標本として保存されてきた貝塚出土の人骨が今日ではそれからDNAを抽出して遺伝学の資料として活用される」との例をあげ、最近の新しい分析法や解析法の開発により、特定研究分野で収集された学術標本が、異なる研究分野の研究・教育の資源として利用できる可能性が増しているとし、多角的に利用できる体制として、ミュージアムの整備を提案している。

○ ミュージアムは、大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供するとともに、学術標本を対象に組織的な独自の研究・教育を行い、さらに、「社会に開かれた大学」の窓口となる施設と位置づけている。

このような動きに対応し、文部省では、平成8年に東京大学、平成9年度に京都大学に大学博物館を設置し、平成10年度は東北大学に設置される予定である。さらに、北海道はじめ、九州、静岡、名古屋などの大学で計画が進められている。

4. 大学博物館と地域文化

これまでの大学博物館は、大学が保有する学術資料を適切に保存し、それを用いて研究し、その成果を展示や大学教育の中で活用する、という活動が中心であった。つまり、博物館というハコモノの中での活動であつた。

○ 最近では、学術資料をデータベース化することにより、ネットワークを通じて学内外と情報を交流したり、第2次、3次資料の交換が盛んになっているが、それも、大学の中の一つの機関としての『博物館』の活動である。

学術審議会の中間報告では、最後を「ミュージアムや学内の関連施設をネットワーク化し、大学全体を知的・文化的情報の発信拠点とすることも今後検討すべき課題であると考えられる。」と結んでいる。大学改革、さらに、生涯学習の視点から大学博物館を考えるとき、この発想こそ出発点になるべきである。

私の考える『大学博物館－ユニバーシティ・ミュージアム』の概念を整理しておこう。

1. 学内のある施設をネットワーク化し、大学全体を博物館と捉える。
2. 学外の関連施設と連携し、大学博物館のサテライトと位置づける。
(学外施設から見れば大学博物館がそのサテライトにあたる。)
3. 地域特有の学術標本・資料・情報のストックハウスとして、標本・資料・情報と利用者の間のイン

ターフェイス機能を果たす。

4. 大学における教育・研究の成果の公開、地域還元の拠点となる。
5. 大学博物館の運営に大学人全員が参画するとともに、地域の人材の積極的な協力を得る(人々の生涯学習の成果の発揮の場とする)。

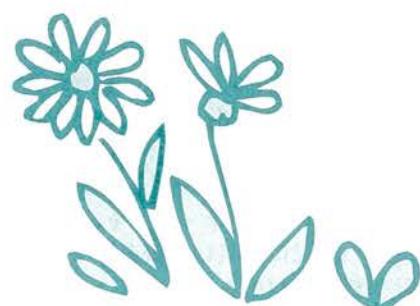
大学全体を博物館にする『大学の博物館化』である。緑と水があり小鳥やリスの棲む、歴史の刻まれたキャンパスは、教職員や学生だけでなく、住民が憩い集う公園、植物園、歴史公園になる。演習林や牧場、農場、臨海実験所、地震観測所、演習船は魅力的な体験学習の場になる。学部や大学院、研究施設に於ける教育や研究は、社会とともに進められることになる。

このようにして、『大学博物館』は、文化の創造、伝統の継承、産業の振興、生活の向上、自然の保護といった地域づくりの拠点の一つとして位置づけられることになる。

本研究部会では、昨年、北海道大学における取り組みについて、現地で協議を行った。他の幾つかの大学においても、それぞれの特徴を活かしつつ、ユニバーシティ・ミュージアムの実現に取り組んでいる。世界に通用する文化を発信すると共に、地域に親しまれ、信頼される、地域の中の大学のセンターとして、ミュージアムの役割は大きい。

①博物館はどのような文化を創造するか、②博物館は地域の文化づくりにどのように貢献できるかを考えるとき、大学の存在を忘れるることはできない。

(部会長：沖吉和祐／筑波技術短期大学副学長)



理論構築研究部会

第3回研究部会報告

1. 開催の趣旨

当部会は他部会の実践的研究と連携するとともに、主として基礎理論・Museum Studies に注目して、「博物館研究の実状—レスター大学の博物館研究を例に—」「最近のミュージアム・マネージメントの動向—コロナード大学のサマーセミナーを中心に—」「博物館資料の活用の手法—スマソニアン原爆展をめぐって—」等の研究協議を開催してきた。

今回は、博物館に最も関係の深い機関である文書館(Archives)の日本における第1人者であられる安澤秀一先生をお招きして、世界及び日本の博物館と文書館の関係や実状などについて紹介いただくこととした。

近年日本においても地方公共団体の公文書館が各地で建設され、文献史料の収集・保存・活用に対する理解が進んできましたが、専門のarchivistを養成する機関がほとんどなく、欧米から大変遅れている状況にあり、博物館・図書館・文書館の連携も十分ではない。このような状況下で、文書館と博物館等との今後の交流の在り方等についての理解を深める機会を企画した。

テーマ：アーカイブズとミュージアムの共存—国際的視野から

講演者：駿河台大学文化情報学部長 安澤秀一教授

日 時：平成10年2月11日(水) 14:00～16:30

会 場：国立科学博物館大会議室

参加者：26名

2. 講演内容

アメリカにおいては、この種の文献史料は一般に公開すべきものであると考えられており、公有財産として誰でもが利用できるべきであるという認識が強く、公的機関による支援とともに多くの個人の力に支えられて活動している。また、ほとんどの施設で、これまでの史料目録を印刷物として提供するのはもちろんのこと、インターネットでも検索が可能となっている。今後は史料・情報そのものがデジタル信号で作成されていることから、インターネットやCDでも大量情報を提供できるように整備されつつある。

1980年代にD.ペアマンはArchives and Museum Informatics誌を主宰し、これらの機関の重要性を強調した。また丁度その頃、博物館の活動がその範囲を大きく広げ、その運営に関する理論が研究され、レスター大学のミュージアム双書が発刊された。ミュージアム・マネージメントにおける記録管理には、組織内部の管理記録と収集物の記録管理がある。組織の記録は、その組織のアイデンティティを表現するものである。

英国の状況は、長い伝統と多くの国民の理解の元に施設や制度が整備され現在に至っている。政府関係からの支援状況の違いによって、施設・設備・活動内容



に大きな違いが生じているように見える。コンピュータ利用などの情報化への対応という意味では、米国や日本に立ち後れている面もある。しかし、15世紀から始まる文献史料を長い年月保存・提供してきた社会的風土とベテランの中に若いアーキビストがいることが社会システムとして機能している。

日本においては、1986年に施行された公文書館法に基づいて、全国各地に地方自治体による文書館が設立され、1994年の全国歴史資料保存利用機関連絡協議会発行の「JSAIデータブック'94」によれば、この様な文献資料を保存している機関は135施設（1993年9月時点）あり、他に企業や宗教法人等でも似た文献史料保存施設があると推定される。この様な法的な整備が行われたものの、以下のような課題があるといわれている。

- ・専門職員の不在
- ・専門機関と設備の不備
- ・科学的保存技術の普及不足
- ・専門職員養成機関の不備
- ・保存・提供活動の広報不足

つまり、日本国民に対して文書館の必要性が認識されていない状況は全く変わりない。この様な状況を解消するためには、先ずより良き利用者を育てることであろう。そのような国民を育てる教育システムと内容が必要であり、次なる段階が専門職員の育成と専門施設の充実であろう。

この様な事情は、博物館や図書館も同じ状況である。少数の研究者のためにだけに公費を費やすことが難しくなってきており、収集・保管・提供の全体を一つの事業として国民に承認されることが必要であり、そのため特に「活用・利用」部分の充実が望まれるところである。この様な意味から、実物と文献史料を収集・保管し公共財として国民にサービスする方法を熟知した専門職員の養成が必要であり、博物館・図書館・アーカイブズ等の機関の綿密な連携に基づく人類の遺産の継承活動が必要であろう。

3. 千葉県公文書館

現在の日本の典型的な公文書館の例として、千葉県文書館の状況が同館の豊川氏から紹介が行われた。

(1)千葉県文書館設置の目的

千葉県文書館設置管理条例（昭和62年）の第2条によれば、「県は、公文書、古文書その他の歴史的な資料の散逸及び消滅を防止し、これを後世に継承するとともにその活用を図り、もって県民の県政に対する関心にこたえるとともに県民の利便に資するため、千葉県文書館を設置する。」とされており、その実態は明治以前の千葉県にかかる古文書と千葉県誕生以降の行政資料を、収集・整理・保存して利用者に提供するものである。

(2)施設の概要

敷地面積2,250m²、建築面積1,070m²、建築延べ床面積6,000m²、書庫面積2,100m²（書架延長距離は約12km）であり、施設としては多目的ホール、フィルム保管庫、公文書・個人情報センター、文書判定室、閲覧室、撮

影室、行政資料室、ビデオシアター、展示室、情報広場、軽食喫茶コーナー、書庫、機械室等がある。建築費用は約24億円。

収蔵資料と利用内容は、公文書は35,113冊の内10,717冊が、古文書は168,701点の内79,772点が、行政資料は64,120冊の内64,120冊が利用できることとなっている。（平成8年3月31日の状況）

(3)事業の概要と課題

事業としては、資料の収集・整理・公開（閲覧）のほかに、情報提供（刊行物の発行など）や県史編纂、文化事業を行っている。文化事業には、講演会の開催（年2回）、古文書講座（夏期）、子ども向け行事（映画会及び民話講演を各年2回）、企画展（開催期間半年のものを年2回）がある。

課題としては、書庫が飽和状態にあること、整理が追いつかないこと、人事異動などにより専門的な職員が育ちにくいくことなどが挙げられた。

（幹事：高安礼士／千葉県立現代産業科学館）



事業戦略研究部会

第3回事業戦略部会報告

年月日：1997年12月20日（土）

場 所：船の科学館

－フローティングパビリオン「羊蹄丸」

コメンテーター：小堀信幸氏、桜井良男氏

（船の科学館）

○文化施設界に‘氷河期’到来？

近鉄と西武は、それぞれ美術館を閉館することを決定したという。このことは、ミュージアム界に少なからぬ波紋をなげかけた。船の科学館の小堀氏は、不景気が長引くこのような時代、一番最初に切られるのは文化施設であると懸念する。こうした傾向は、民間、公を問わず、同様といえよう。大阪府などは、大々的な人員削減を計画し、すでにその方向性を発表した。本体がそのような状況にあるなかで、博物館が人手や運営予算の不足を訴えても、聞く耳があるとは思われない。それどころか、補助金や人員の削減、閉館の危機すらないとはいいきれないのだ。まさに、文化施設の‘氷河期’といった感じだろうか……。

「そうならないためには、やはり、入館者数の確保が大切である」という。船の科学館は、ホテルやレストラン経営など、他のミュージアム施設に比較して幅広い自主事業を展開しており、自他ともが認める自立志向の強い施設であるといえる。しかしながら、やはり、補助金なしでは運営が不可能であるという。これまで、博物館の現場では、より市民に愛される博物館づくりを行っていくためには人材と運営予算を確保していくことが、一つの重要な課題であるとしてきたが、ここにきて、その困難さがより強く浮き彫りになってしまったといえる。

○多くの人々に足を運んでもらうためには、

展示だけではダメ！

船の科学館には営業部門がある。時代の風は厳しくなったといえども、船の科学館のクルーたちはひるまない！今回の訪問で感心させられたことの一つが、この船の科学館の営業マンたちの熱意と行動力である。

施設を作った！最新メディアを導入した！魅力的な展示もおいしいレストランもある！きっとたくさんの人々が来てくれるだろう！！！しかし、そう簡単にはいかないという。船の科学館の営業マンたちは、パンフレットを片手に、それこそ北は北海道、南は沖縄まで営業活動にまわる。その時の競合相手は、なんと‘東京タワーさん’だという。時には、隣接する共同溝の見学やプールでのボート教室など、「船の科学館」の一般的利用イメージを越えた、ユニークなお客様をゲットしてきて、スタッフを驚かせてくれることもあるという。

さて、営業の最重点ターゲットは、修学旅行の学生

たちだ。以前、小中学校や教育委員会をまわったことがあるそうだが、その時はほとんど効果がなかつたという。現在は、もっぱら修学旅行を取り扱っている旅行社に営業しているとのことだ。単にツアールートに組み込んでもらうだけではなく、東京滞在中の集合場所として、あるいは昼食場所として積極的に施設を利用してもらえるように働きかけるのだという。もちろん、ただ働きかけるだけでなく、そのための体制づくりやサービス提供に非常に力を注いでいる。一学年の生徒全員を一度に収容できるスペースの確保、都内に分散した生徒たちと教師をつなぐ電話サービス、安価でおいしい食事の提供等、学校側のニーズに積極的に対応しようとしている。団体利用は、入館者数を飛躍的にのばしてくれるとともに、高収入にもつながり、営業的には最も力を注ぐ部分である。しかしながら、団体行動からグループ行動へと修学旅行の形態が変わっていく傾向にあり、修学旅行による団体神話も崩れつつあるという。

○学芸員問題と学校教育との連携

これから博物館のあり方を考えていくうえでの重要なポイントとして、学芸員問題と学校教育との連携のあり方が話題にのぼり、活発な意見が交わされた。

学芸員教育と博物館の現状が、必ずしもうまく対応しているとはいえないのではないか。そんな疑問があげられた。学芸員資格を取得する際の対象分野は、歴史博物館、自然史博物館、美術館等の一般的な博物館を想定したものとなっており、拓本がとれる人や美術史に精通した学芸員は豊富にいても、たとえば、乗船経験をもつた船に詳しい学芸員を見つけ出すことは非常に難しく、船の科学館のような特別なテーマにはなかなか対応しがたいところがある。

船の科学館では、船の科学というテーマ性に相応しい知識や経験よりも、むしろ、博物館経営のノウハウや知識を学芸員に求めるという。出席者の方からも、これからは、学芸員の機能分化が必要で、テーマに即した学術的な専門性だけでなく、たとえば、ミュージアムマネジメントを修めた、どのような博物館にも対応できるような人材が重要になってくるという意見もあった。

学校教育との連携については、以下のような意見が交わされた。

学校教育と博物館教育のあいだは、社会科見学の効率化、教育費のしめつけ等が顕著化している今日、ますますその距離を広めていく傾向にある。週休二日制の導入にともない最初に削られたのは、音楽・美術等の文化教育である。こうした現状を考えると、むしろ、博物館の児童・学童教育における役割は大きなものとなっていくように思われたが、受験勉強が優先されがちなわが国の学校教育のなかでは、そのような動きはあまりみられない。このままでは、学校教育のな

かの博物館の位置づけさへおぼろげなものとなってしまう。部会では、「学校からのアプローチを待つのではなく、博物館の方から学校へ積極的に働きかけていくことが必要である」「博物館の利用の仕方を社会に広めていくという視点は非常に重要だ」「学校とのパイプづくりを行い、学校と博物館がいつしょになって博物館をどのように学校教育のなかにとりいれていくのかを考える場を設けていくべきだ」、等々の意見が活発に出された。

○総括. 「博物館はサービス業」この姿勢も大切！

さて、この度、「船の科学館」に学ばせて頂いた最大のこととは、「博物館はサービス業」、この言葉に集約されるような気がする。博物館は、どんなに高尚な学問や文化をとりあげていようとも、基本はお客様をお迎えするところ。迎える体制を博物館でつくっていかなければ、どんなに立派な研究成果があつても、それを社会に還元しているとはいがたい。そのようなこ

とを改めて考えさせられた。お客様の声やニーズをどれだけ博物館に反映させられたか、なによりも、このことがミュージアムを評価するうえで重要なポイントであるという。そのためには、どんな立場のスタッフでも、お客様と接する機会をできるだけたくさんもつよう努め、つねにお客さまの視点から博物館を考えることが大切だという。

(幹事：斎藤恵理／(株)文化環境研究所)

☆お詫びと訂正

第2回の事業戦略部会の報告の記述に誤りがあつたことをお詫びするとともに、この場をかりてご訂正させて頂きます。関係者の方には、ご迷惑をおかけしました。

誤「東北歴史資料館」→正「東北歴史博物館」

誤「神奈川県立博物館」→正「神奈川県立歴史博物館」



ソフトサービス研究部会報告

第3回研究部会

『UCCコーヒー博物館にホスピタリティの現場を見る』

ソフトサービス研究部会では、12月13日（土）・14日（日）にかけて、神戸で開催されていた「夢灯す、光の彫刻 KOBE・ルミナリエ」の見学と、ミュージアム・ホスピタリティ実践の先駆的存在であるUCCコーヒー博物館の女性スタッフの朝礼を視察させていただく1泊2日の研修旅行を企画、開催した。

両日で研究部会長である諸岡博熊館長以下、28名に及ぶ参加者を得て、盛況の内に実施された。

◆震災からの復興を照らす光の祭典・ルミナリエ

研修旅行の初日は、6時に三宮駅に集合し、南京町の中華料理屋さんで会食の後に、KOBE・ルミナリエを見学する日程であった。

KOBE・ルミナリエは、16世紀後半、ヨーロッパで祭礼・装飾芸術として誕生した光の彫刻“ルミナリエ”を震災から復興を遂げる神戸の地で開催する大きなイベントである。アートディレクターにバアレリオ・フェスティ氏（イタリア）を迎え、神戸の旧外国人居留地および東遊園地・北野町広場・JR新神戸駅前広場を会場にまばゆいばかりの光の祭典として繰り広げられた。諸岡館長により著された『博物館経営論』にも、観光マーケティングの一例として紹介されるイベントである。かつて悲劇的な震災で壊滅的な打撃を受けた神戸が復興を声高らかに宣言するかのように、市の行政、企業が一丸となって推進しており、今回はその3回目であった。

参加したJMMA会員諸氏もこのショウを存分に楽しんで頂けたことと思う。

前年の第2回には、通算で385万人の人々が来場したイベントであり、当日も大変な人出で、数名の会員が一行からはぐれてしまうというハプニングもあった。

◆UCCコーヒー博物館のホスピタリティ現場

翌日は、早朝の8時50分にUCCコーヒー博物館に集合し、同館の講習室で女性スタッフの朝礼風景を見学させていただき、その後、女性スタッフの展示解説付のエスコート・サービスを受けた。

この日は、残念なことに、総勢5名いらっしゃる女性スタッフの内、1人は風邪をひかれ、1人はご出張をされており、3名の女性スタッフでの朝礼を見学させていただいた。

ミュージアムでのホスピタリティを第一に考えられる諸岡館長の指導により、同館では、女性スタッフ（同館では“コンパニオン”と称す）が立居振舞いやその日の姿勢、服装をチェックできる80m²ほどの鏡張りの専用講習室が備えられており、女性スタッフの毎朝の朝礼もここで行われる。

朝礼は、1人の女性スタッフがリードし、活舌と発声の訓練、体をほぐすための体操に始り、その日の団体受け入れ状況の確認や「UCCコーヒー博物館員の心得三ヶ条」を唱和するなどのメニューをこなしていた。参加者は、永年にわたって積み重ねられた同館のホスピタリティの一端を垣間みることができたのである。

今回の参加者には、各地のミュージアムで、実際に接遇を行う女性スタッフも多く参加され、また、彼女らを管理、教育する企業PR施設や企業博物館のマネジャー層の参加も多く得られた。こうした参加者からは、UCCコーヒー博物館の実践の姿に、深く感銘し、参考とすることができた研修旅行であったという感想が多かった。

午前中のUCCコーヒー博物館の研修後は、希望者有志でオープン後間もない「神戸ファッショングループ美術館」を訪れ、同館のガイドツアーも体験するなど、様々なホスピタリティのあり方に、直に触れることのできる研修旅行となつた。

(幹事：重盛恭一／トータルメディア開発研究所)

UCCコーヒー博物館 館員の心得三ヶ条

- 1 私たちUCCコーヒー博物館に勤務する館員すべては、親切、明朗をモットーとし、笑顔と誠意をもって、礼儀正しく来館のお客様に接します。
- 2 私たちUCCコーヒー博物館に勤務する館員すべては、健康に留意し、好奇心旺盛、勉強に励み、プロの適性を磨くよう努力します。
- 3 私たちUCCコーヒー博物館に勤務する館員すべては、協調性を尊び、時間を確実に守り、責任をもって仕事を遂行します。

教育・コミュニケーション研究部会

第3回部会報告

「大学博物館における新しいコミュニケーションの試み」

○はじめに

東京大学総合研究博物館は昨年1月21日から2月20日まで特別展「デジタルミュージアム - 電脳博物館-博物館の未来 -」を開催した。それは博物館及び博物館と見学者・利用者の関係を大きく変革する可能性をもつ試みで、かねてから当部会で研究したいと考えていた。そのようなおり、10月26日から12月14日まで「東京大学120周年記念東京大学展 - 学問の過去・現在・未来」が開かれた。その第4部の特設エアドーム「知の開放」がデジタルミュージアムであるということで、推進者である東京大学総合研究博物館教授の坂村健氏にデジタルミュージアム及び今回の展示についてご説明いただいた。

イチョウが色づきはじめた東京に久しぶりの雨が降る11月22日の午後、24名が参加し、東大赤門横の学士会分館及びドーム会場で説明、質疑を行った。

○学士会分館での説明

この特別展はタイトル通り東京大学の学問について4部に分けて公開するものであるが、第4部以外は過去についてのモノを中心とした展示である。それに対し、第4部は学問の現在と未来についての展示であるので、モノだけでは説明できず、モノとコンピュータによる動画、音声などのマルチメディアにより展示している。

東京大学総合研究博物館は東京大学総合研究資料館が発展して1996年にできた全学施設で、豊富な資料を調査研究するとともに、博物館そのもの、さらに未来の博物館を研究する施設である。

そして、デジタルミュージアムはコンピュータを情報の整理だけでなく、ホームページ等による映像による収蔵物の公開のほか、博物館のあらゆる機能にコンピュータをフルに活用した博物館である。具体的には、収蔵物のデジタルアーカイブ、コンピュータを活用した展示技術の開発、携帯型端末を利用した展示情報の提供などである。バーチャルミュージアムはモノや展示スペースがなくても成立するものである。デジタルミュージアムはモノを大切に保管し、あるいは展示しつつ、コンピュータによるあらゆる可能性を追求するというリアルとバーチャルを融合させた考え方である。図録によれば「デジタルミュージアム」は「収納物をオープン」にし、障害者や外国人など博物館見学者に対し「誰にでもオープン」にし、「時間と場所にオープン」にするもので、さまざまなバリアを解いて、知の開放を目指している。

デジタル化の効用はいくつある。モノの研究や属

性などの情報のデータを入力して永久アーカイブを作ることにより、モノへのアクセス回数を減らすことで、モノの寿命を伸ばすことにつながる。モノが分散されている場合は総合的に相互関係を見ることができる。そして、いろいろな博物館が統一的なデータフォーマットで結ばれることにより、分散された資料の横断的な、網状的な検索が可能となるネットワークミュージアムを形成することができる。また、デジタル化はマルチメディア・プレゼンテーションを可能にする。つまり、モノの裏側や底を見せることもできるし、声を出させることもできる。モノにタグをつけて電波を送ると反応して情報を送り返すことができ、収納や管理を飛躍的に合理化することができる。このタグは安価で、メモリーをつけることもでき、広く応用できる。さらに、デジタル化する場合の標準化、指針づくりにも力を入れている。

トロンとの関係でいえば、コンピュータ操作の標準化のほか、現在流通しているコンピュータの文字コード表にはない文字を収納できるTRONコードを開発し、表示のためのフォントの開発も行っている。

「知の開放」プロジェクトは、東京大学の知を積極的に公開、オープンするべきであるとの認識から始めたもので、20世紀型集中社会の東京大学が目指したもののが「知の中心」だとすれば、21世紀型分散社会における東京大学は「知の流通の中心」でありたいという。分散された社会においては誰もが情報を得ることができることが重要で、デジタルミュージアムは博物館を開き、知を開放するものである。

○特設ドーム「知の開放」における説明

ドームは面積480m²、縦約30m、横約20m、高さ約13mのエアドーム式建築である。ドーム内には、入口を入った所の中央にステージがあり、インターネットとCS放送及び両者の融合型という新しい技術で学術上のさまざまな情報公開を行っている。そして、東大の各学部、研究科、研究所などの知の現在を紹介するために、それぞれごとに、カプセルに納められた本物の展示を中心として、その解説ビデオ、関連情報を引き出せる対話型のディスプレイ、関連した仮想世界に入ることのできるマルチ・ユーザー・ダンジョンという3つのコントロールタワーがワンセットになっている。また、携帯型端末を展示に近づけると展示内容を文字と音声で解説するシステムも用意されている。さらに、ドームの奥には半球状の「ビジョンドーム」があり、コンピュータによる立体的な映像を見ることができる。

コンピュータがモノを大切にし、知を開放し、博物館利用に困難があるさまざまなバリアを取り除き、博物館を開いて利用しやすくするのだという、熱気あふれる坂村氏の話を聞き、教育・コミュニケーションの新たな可能性に目を開かされた。

(幹事:石川 昇/国立科学博物館)

合同研究部会報告（1）

制度問題研究部会は、ソフトサービス研究部会、事業戦略研究部会との合同により、「ボストン・チルドレンズ・ミュージアムがいつも素敵なわけ」と題する講演会を下記の通り開催した。

日 時：平成9年11月22日(土)10:00～12:00

場 所：国立科学博物大会議室

参加者数：

今回はボストン・チルドレンズ・ミュージアムのダイアン・ウィロー（Diane Willow）氏を招き講演会を開催した。以下に改めてボストン・チルドレンズ・ミュージアムとダイアン・ウィロー氏のプロフィールを紹介する。

<ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの紹介>

ボストン・チルドレンズ・ミュージアムは1913年にボストンの近郊のジャマイカ・プレインに科学の教師たちによって、科学教育の振興のために教材や意見を交換するセンターとして設立された。1979年に現在のフォート・ポイント・チャネルに移り、ボストンの多文化社会における都市型ミュージアムとして、文化的、経済的に多様な人々を対象とした子ども向けのさまざまな教育活動を行っている。創造力や好奇心をかき立てるようなさまざまなプログラムを通じて、子どもたちが自然界や他者に対する敬意をもつて、自分たちの住んでいる世界を理解し、楽しく生きられることをねらいとしている。

<ダイアン・ウィロー氏の紹介>

1976年よりボストン・チルドレンズ・ミュージアムに勤務し、現在エクスペリメンタル・メディア・

スタディオ・ディレクターとしてつとめる。展覧会やプログラムのディベロッパー、マルチメディア・アーチストとして、子どもと自然と都市環境をテーマにした展覧会の企画や教材開発を行っている。

主な展示プロジェクトとして、「子どもが見た環境の実態 (The Green Facts According to Kids)」、「埠頭の下 (Under the Dock)」等の都市環境などに焦点をあてたもの、また「内部への探究」では、人間と都市環境との関係をテーマにして子どもや教師向けカリキュラムや教材の開発などを手がけている。

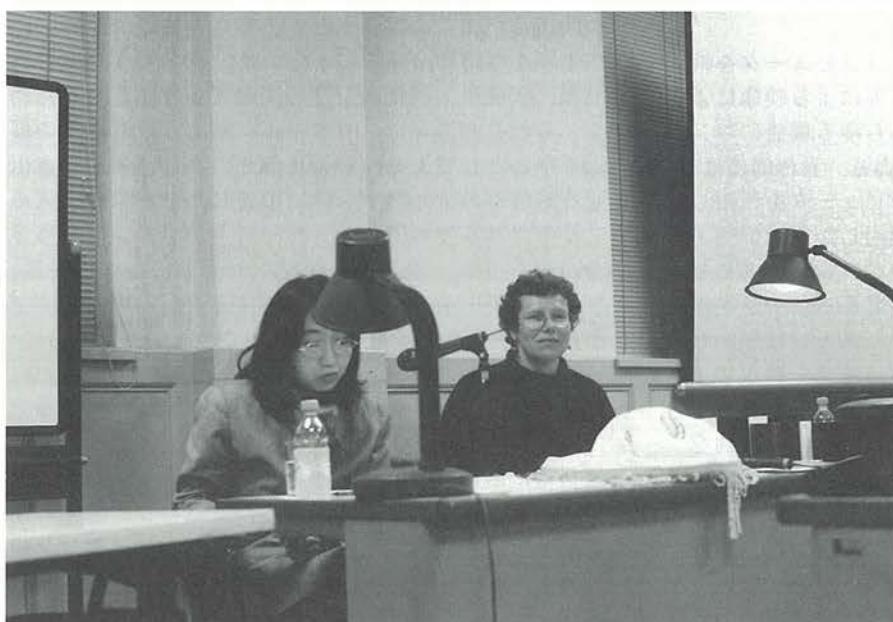
*以上ウィロー氏提供の資料（竹内有理会員訳）による。

今回の講演会ではボストン・チルドレンズ・ミュージアムの魅力を生み出すマネージメントについて以下の三つの視点に絞って探ってみた。第一は、ボストン・チルドレンズ・ミュージアムにおける人材育成についてである。第二は、博物館の施設の枠組みを越えた活動の広がりについて考察する。第三は、よりよい展示を生み出すためにその発想から評価活動までをどのように行っているかについて考察する。

まずボストン・チルドレンズ・ミュージアムの歴史的な紹介があった。設立当時は科学の教師を中心とした自然史や民族学的なテーマを中心とした施設であったが、マイケル・スパックが館長になり大きな転換をした。さらに次の館長のケンブリッジはボストンの近郊に目を向け、キッズブリッジ等の人種の多様性について目を向けるようになった。現在は館長ルーカス・グランデのもと学校教育や全米の教育改革の分野に積極的に関わっている。

講演会の前半は展示プロジェクトである「埠頭の下」を例にあげて展示発想にいたった経緯、展示製作のよ

うす、展示製作のための資金援助等について紹介があった。展示は常設展示、3年～5年の長期的な展示、短期的な展示に分けているようである。連邦政府や環境保護の財団などから資金援助を受け、展示製作をしているということである。また「子どもが見た環境の実態」の展示プロジェクトでは、子どもたちに対するインタビューをヒントに展示の構想をしている。子どもたちのインタビューには植物、動物、空気、ゴミ等の身近なテーマに関することが多く、展示内容もこの意見を取り入れた形で製作されている。特に生きている動物を展示したり、動物や植物等に親しむ方法を見つけることに重点をおいているようである。



具体的には身近なボストンの都市環境に焦点をあてインタラクティブな映像展示や飼育展示を行っている。肉眼では見えない微小な生物については新たにビューシステムという展示手法を開発するなど、インタラクティブな映像展示が特徴である。展示の方針としては、展示物が子どもたちにとってインタラクティブであり、オープンエンドであること、さらにいろいろなレベルの人が関わるような奥行きのある展示をめざしているということであった。

次に展示運営について紹介があった。ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの「子どもがみた環境の実態」の展示における運営ではロールプレイの手法を取り入れている。アメリカの博物館では、環境問題を人形劇で表現したり、ある生き物になって演じてみたり、さらに工場の従業員や管理者になって製品を作る過程を通じて、産業や経済の仕組みについて学ぶといったロールプレイを積極的に取り入れている博物館が見受けられる。

最後は、参加者からの質問、意見を受けながら会を進めた。質問が集中したのは展示評価についてであった。展示内容にもよるが展示評価は内部のスタッフが兼務する形で行っているようである。また展示の評価の観点や教育目標については知識の獲得にこだわらず子どもたちの参加性を重視し、学校教育との違いを明確にしていることが印象的であった。アメリカの科学

系博物館では展示評価者（Evaluator）を博物館のスタッフとして位置づけているところが増えつつあるようである。またマネージメントの視点から、組織や展示プロジェクトを立ち上げる際の資金面の援助について質問があつた。組織については、館長のほか、財務担当、広報担当、展示プロジェクト担当等の副館長がおり、その下にプログラム・ディレクターといわれるプログラム開発運営に関わるスタッフがいる。年間予算は1100万ドル（15億円程度）で入館料、連邦政府、州政府からの援助やさまざまな財団、団体からの助成金などからなるということであった。

時間的な制約のため最初に示した三つ視点のうち展示評価が中心になり、人材育成の面などについて充分に議論が深められなかつた。多くの博物館関係者がボストン・チルドレンズ・ミュージアムを訪れるが、今回の講演会では展示の作成意図やその作成の過程、評価等について資金面やスタッフの関わり方など博物館内部の状況にミュージアム・マネージメントの視点から考察を深められたのではないだろうか。わが国では博物館などの文化施設がともすると「箱もの」となってしまう傾向があるが、運営を想定して展示を製作していくことの重要性について再認識させられた。また博物館の展示活動を重視し、展示製作の発想の段階から評価活動を行っていることが伺い知ることができた。

（制度問題研究部会幹事：小川義和／国立科学博物館）



合同研究部会報告（2）

名古屋港水族館ミュージアムショップ ～水族館で出会った感動・興味・関心をグッズに～

1月31日（土）名古屋港水族館において第3回ミュージアムショップ研究部会が行われました。今回の研究部会はソフトサービス部会と合同で2日間かけて行われました。1日目は名古屋港水族館（ミュージアムショップ研究部会）、2日目はトヨタ博物館（ソフトサービス研究部会）という日程で、移動の間にお互い情報交換する姿が見られました。

名古屋港水族館においての参加者は29名。合同部会の為、各部会の質問に学ぶところも多かったと思います。研究会では、まず館内を自由に見学させていただいた後、管理部長の片桐さんに同館の運営について、業務課主査の原さんにショップ経営についてのお話をいただきました。見学直後の質疑応答は、具体的な質問も多く、また人気のグッズを手にとりながらグッズの説明をしていただきました。

ところで財団法人名古屋港水族館は、近寄りがたい港を再開発して一般市民の場にするため2年6ヶ月をかけ、平成4年10月29日にオープンしました。職員は事務職員45人（名古屋港管理組合からの出向）と飼育職員23人（財団が独自に採用）となっています。

オープン後4年7ヶ月で1000万人を達成しましたが、最近は減少してきているそうです。展示構成は「南極への旅」と題し、日本の海から赤道を経て南極へ道筋をたどるようになっています。

○名古屋港水族館ミュージアムショップの運営について

ミュージアムショップは、財団法人名古屋港水族館（愛知県、名古屋市、名古屋港管理組合によって設立された第3セクターで運営されている）の直営です。

ショップは展示の一部であるという考え方から、展示テーマにそつたものをおいています。また感動したものを持ち帰るものであるという理

念をもっています。

ショップにおいてある商品は厳選されたものだけあって、海の生き物が好きな人にはたまらない品ぞろえです。通信販売もしています。

特徴は完全委託販売で、開発・製作費はすべて業者持ちの上、買い取りはしません。それゆえいいものを作つてほしいとお願いしても、商品が良くても売れないだろうと思われて開発がすすまないという問題点もあります。

今後の課題としては男性と女性の大人のものが弱いので、これからはそういう方へむけての商品を開発したいということです。

○人気のあるミュージアムグッズ

[キャラクター文具セット（1000円、1500円）]

ふでばこ、鉛筆、ハンカチ、メモ帳などがははいつていて、クリスマス用のプレゼントを探す大人にかなりうけました。

[ベビー用タンクトップ、よだれかけなど]

手ごろな値段でかわいらしい商品。お年寄りがよく買っていくそうです。これまでに品薄だった年齢層をキャッチ。

[すき寿亀（すき） 和三盆 オリジナル商品]

ミュージアムグッズとしてのお菓子を追求。亀の形の和三盆。手作りのため大量に作ることができないが、いいおかしが欲しいということでおいています。予想に反し、夏休みは毎日売り切れる程でした。

その他 [漆塗りのお箸] [授産所の木工品] [ボーンチャイナのカメの置物]

などがあり、グッズを開発するときは館長や飼育の人へ助言してもらっているそうです。

グッズの説明と質疑応答の後、ショップへ向かい、再び購入している方も多く、やはりグッズには説明が大切で、またそれが購買欲をかきたてるものです。



ショッピングメイトを含む、館内の職員のチームワークがいいのでその秘けつは、という質問に「みんながよく勉強していること、館に愛情をもつてること、館長への信頼があること」というお答えをいただきました。

職員が愛情をもつて働く姿は訪れる者にも伝わってきます。そのチームワークはほかの館に於いても大変参考になると思います。

研究会終了後に通過させてもらったショッピングメイトの控え室ではショッピングメイトの方が季節に関連した(ひなまつり)ディスプレイ案を作成中でした。そんな光景ひとつとっても楽しそうな感じが伝わってきました。

(山田礼子／(株)ミュゼ)

ミュージアム・ショップ、ソフトサービス 合同研究部会2日目 ～平成10年2月1日（日）トヨタ博物館視察～

1泊2日の合同研究部会の2日目は、開館後10年目を迎えたトヨタ博物館を視察するものであった。前日のみの参加者とこの日のみの参加者が入れ替わり、総勢26名で名古屋市隣接の長久手町に建つ博物館を訪れた。

トヨタ博物館は、愛知県内と静岡県内に点在するトヨタグループの5つの文化施設^{*}のなかで、トヨタの主力産業である自動車の歴史を学ぶ博物館である。

他の4つの文化施設に比して、内容的には、最も良く企業博物館としての性格を有する博物館である。

展示内容としては、トヨタの自動車造りのみに限らず、ガソリン自動車の誕生からT型フォードに代表される大衆車の登場などを各国の自動車の展示で語る自動車誕生後50年と、戦後の日本の自動車の歴史50年で構成している。この100年の自動車の歴史を自社の製品のみでなく、ライバルである内外の各自動車産業の代表作を收集展示している点が、単なる企業PR館ではなく企業を取り巻く産業文化全体を捉えたものとして評価できる。

当日は、まず森館長から館の概要説明があつたのち、TAMレディと呼ばれる接遇スタッフの案内で展示室を視察。ミュージアム・ショップを見た後、質疑応答を行った。

この日は、ソフトサービス研究部会の視察ではあつたが、前日の名古屋港水族館のショッピング視察の記憶が参加者に強く残っていたためか、ショッピングに関する質問も多く出た。

「自動車をテーマにしているため、ショッピングの雰囲気がマニア向け、男性向けのような気がする。女性ドライバーも多い昨今、女性に対する商品開発や雰囲気作りをどう考えるか?」「キーホルダー等が売れ筋の様だが、トヨタグループの文化施設全体で同じ商品を館名を変えて提供することで、ロット的に問題なく開発できるのではないか?」との意見などが出た。これらは、トヨタグループの文化施設いずれのショッピング経営の委託を受ける、トヨタエンタープライズと各博物館

が共通して抱える課題だともいう。

その他、収蔵する自動車のほとんど全ては動かすことが出来るよう整備されていて、年一回、近隣の愛知青少年公園でその車に試乗できる「クラシックカーフェスティバル」を開催し、人気を博している。また、学校教育との連携のために副読本を制作し各学校に配っている。この制作にはエピソードがあつて、当初、表紙に企業名を入れていたところ、教育委員会から宣伝に繋がるので配布できないと言う断りがあつたという。現在は、表紙に館名を入れない形で配布してもらっているが、このことは、企業博物館の公共性とは何かということを考える上で重要な課題を提供している。この点については、今後、充分な研究と企業博物館の発展によって、その公共性が認められ、早い時期に解消されることがぞまれるものだといえよう。

最後に会終了後、博物館のレストランでお土産にも最適なカレーライスを食し、解散した。

(ソフトサービス研究部会幹事：重盛恭一
／トータルメディア開発研究所)

※トヨタグループの文化施設

トヨタ会館；愛知県豊田市トヨタ町

トヨタのモノ作り全般を紹介する工場に付属する施設。

トヨタ博物館；愛知県長久手町

自動車誕生以降100年の歴史を紹介する博物館。

トヨタ鞍ヶ池記念館；愛知県豊田市池田町

「THE LIVING ROAD」をテーマに、交通に賭ける人類の英知とトヨタの足跡を展示。

産業技術館；愛知県名古屋市西区

次代を担う若い世代にモノ作りの楽しさを伝える、織維産業と自動車産業技術の展示。

豊田左吉記念館；静岡県湖西市

豊田左吉の生家の展示や左吉の情熱を伝えるメモリアル。



書評



『企業ミュージアム』

(新書版、240頁、定価1,000円) 発行のお知らせ
亀井訓生(企業ミュージアムコンサルタント)

かねて、全国の“企業ミュージアム”的アンケート調査にもとづくデータをベースに、出版をすすめておりました首記の小本、2月11日に発刊することが出来ました。ご協力いただきました会員の方々並びに関係の多数の皆様に心からお禮申し上げます。515館のガイドとしてもけいたいに便利な小形な版が受けて好評です。

出版社は(株)ピーエース(〒565-0855 吹田市佐竹台3-8-3、電話06-872-0969、FAX06-872-1101)です。旭屋書店、紀伊国屋書店(梅田、新宿本店)、八重洲ブックセンター、アシーネ、ジュンク堂など有力書店でご購入いただすることができます。

インターネットHP; <http://ss4.inet-osaka.or.jp/~senri>でも販売を開始しています。電話、FAXによる直接販売もいたしておりますのでご利用下さい(郵送込みで1冊1,270円を郵便振替口座00920-2-109205、(株)ピーエース宛お振り込み下さい)。

会員からのメッセージ

◆奥野花代子(神奈川県立生命の星・地球博物館)
神奈川県立生命の星・地球博物館の3周年記念事業シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして~視覚障害者と博物館~」開催のお知らせ

神奈川県立生命の星・地球博物館は、お陰さまで、この3月20日に開館3周年を迎え、3月21日から29日まで「開館3周年記念週間~生命の星・地球フェスタ・98~」を開催します。

当館は開館以来「開かれた博物館」をめざし、1997年

は「ライブな=生(なま)の博物館」を目標にし、そして、1998年の今年は「ユニバーサルな博物館」をモットーに活動することにしました。

“物を展示する、映像を活用する”ことに力を注いできた博物館園にとって、目の不自由な方々にいかに利用していただくかという努力は大変不十分でした。そこですべての人に愛していただける博物館をともに考えたいと、3月22日(日)10時から16時15分まで、3周年のメイン行事として、シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして~視覚障害者と博物館~」を計画しました。

当日の内容は次のとおりです。

1. 基調講演 “開館3周年を迎えて”「開かれた博物館をめざして~いのちとこころの時代~」
神奈川県立 生命の星・地球博物館
館長 濱田隆士
2. 基調報告「博物館における視覚障害者への対応について~全国の主な博物館園へのアンケート調査結果および当館の事例~」
神奈川県立生命の星・地球博物館
主任学芸員 奥野花代子
3. 事例報告(順不同、敬称略)

上野動物園・こども動物園	主事 萩西宣宏
東京都台東区下町風俗資料館	館長 椎名勤治
茨城県自然博物館	主査 的場伸一
國學院大学博物館学研究室	助手 山本哲也
筑波大学附属盲学校	教諭 鳥山由子
嘉悦女子短期大学	教授 生井良一
	(目の不自由な方)
筑波大学附属盲学校	教諭 青松利明
	(目の不自由な方)
4. 討論「パネルディスカッション」
県立生命の星・地球博物館濱田隆士館長(座長)
と事例報告発表者による

日頃、博物館マネジメントにとくにご関心をお寄せくださいます皆様に是非、ご参加いただき、フロアから活発なご意見を頂戴いたしたくご案内申しあげます。

なお、ご参加いただけます場合には、整理の都合上、お手数ですが、往復はがきに、住所、氏名、年齢、所属、電話番号を明記して、3月14日(日)までにお申し込みください。

また、このシンポジウムをふまえて、今秋に“博物館検討シリーズⅡ”「開かれた博物館をめざして~博物館におけるバリアフリー~」(仮題)を刊行の予定です。

この件に関する問い合わせ、申し込み先は

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
神奈川県立生命の星・地球博物館 奥野花代子
TEL 0465-21-1515 FAX 0465-23-8846
E-mail (jyouhou@pat-net.ne.jp)

◆小栗卓二 ((株)ココロ)

[博物館の根つこの話]

去年の秋私は会社の仕事で、デンバーの自然史博物館とサンフランシスコアカデミーサイエンスセンターを訪ねることになりました。

お気づきのように私は博物館に勤める者ではなく民間企業に勤めています。我々の会社名はカタカナでココロと言い（会報No.5会員からのメッセージに登場）海外の博物館においては特別展等で恐竜やからくり人形、昆虫等のロボットを製作、特別展等で使って頂いている会社です。その関係で海外に出向くことになりました。そしてまさに特別展が終わり次へ移動するための撤去作業の最中でした。

此処で私は8年ぶりにアメリカの生の博物館にふれたのですが、此方も経験が増えた分いろいろな見方も出来、また色々な事も実感として分かつてきました。

既に関係者の方はご存知だと思いますが、その運営スタイルは水と油ほどの違いが感じられたのは私だけでは無いでしょう。まず外見上はお互いに変わらずともその成り立ちが羨ましいほど文化として根付いている点でしょう。

まず企業の寄付や、製作や運営を助けるボランティアの存在が大きく、そして、ワークショップチームやかれらの働く環境、設備が違すぎると思われ（最近の博物館はそうでもないようですが）、まず仕事を行うための搬入口やその導線上の入り口等の工夫はそこで働く者の立場に立って考えられていますが、日本の場合、ともすると搬入口は最終的にふさがれてしまう事が多く、それはたぶん消防法の防火区画に伴う、建築規制によるところが大きな原因と思われますが、その他にはデザインによるところも大きいのではないかでしょうか。

そしてボランティアの人々が此方で言うところの手間仕事をせつせとこなしています。それはたとえば植栽の葉っぱの形押し、抜き、着色、接着等や化石のクリーニング等の作業を手伝い博物館に関わることを非常に誇りに思つてることが手に取るように伺えました。このことは博物館の財政的な負担を助けるばかりか市民側が積極的に参加（訪れるだけではなく）していることを語つており、しかしそれでも尚特別展を催す事で、リピーターの確保に懸命であることも伺えます。設備においては我々の製作スペースや工作機具にもひけをとらないどころか小さな町の工房よりも数段揃つており、印刷等も破格に大きい物以外は内部で製作してしまう。この事は彼ら曰く、「方法論や出来に迷った場合直ちにサンプルを自分達で速やかに起こせる事がより重要である。」とのこと。これは我々国内の事で言うと製作費、つまり館側から見ると発注額、我々では製作原価と言う物の考えが同じ次元ではなく、完成納期に至つては、製作費が足りなければ、寄付等がたまるまで延ばせば良い、というスタンスをとれる点も大きく異なります。

又彼らはそれが当たり前かのように振るまい話し、そ

して外から来た作業チームも背景屋、造型屋という感覚ではなく、アーティストなのであり彼らも又誇りを持って振るまい話しします。

彼らのような関係が成り立つ土壤こそ、たとえば自分の子供達に博物館を見せ教え教える、自信を持つて連れて行ける場所ではないでしょうか？

我々の仕事を彼らは「博物館内では手に余る種類の特殊技能」と認めてくれるおかげで、とても良い環境で仕事ができますし、そして最近はただロボットを提供するのではなく、共同企画で特別展を立ち上げる様にもなってきました。そしてその事が今回の様な見るチャンスを多く作ってくれているのだとおもいます。

我々も海外の方が多少思い切りの良い仕様を受け入れられます。なぜなら、彼らには「ワークショップチーム」があり、相当な修理対応をこなすからです。

壊れることの対応の中からも信頼関係が生まれるし彼らが誇りを持って仕事をする分その気持ちが我々にも伝染するようで得をした気分にさせられます。

何にしても、博物館の中で働く人、外から関わって働く人、そして利用してくれるビジターそれらすべてが誇りを持って関わっている事が一番めざすべき点でも一番難しい挑戦でもあるように思います。

日本にもボランティア活動はあり阪神大震災以降本質的なものになったとも言われ、また質的にも勝るとも劣らない活動者はいますが、それはまだ点であり面にはなっていないと思われています。しかし変化しだすとするなら、博物館側よりもビジター側の方が「意識だけの問題」なだけに変わる見込みが有るのではないかでしょうか？それは今以上に与える場と、与えられる場の関係以上の関係を目指す事だと思います。そしてそれは決して具体的な姿をした物ではないですが地面の下に大きく伸びた文化という「ねっこ」の様な物でしょう。

最後にもう一度「自分の子供を何度も連れて行きたくなる」博物館を作りたいし関わって行きたいと思います。

（開発営業部開発営業課 課長）

◆島村有香（オックスフォード在住）

急に留学が決まり、97年の秋からイギリスに来ています。日頃お世話になっていましたJ M M Aの皆様に、何の御挨拶もできず気になつておりましたので、この場をお借りすることにしました。

97年の夏、東京都美術館で行われた「魂の対話」展にボランティアコーディネーターの一人として参加し、延べ1,000人（実数400人）のボランティアをオーガナイズする機会を得、貴重な経験をしました。その後渡英し、現在、大学院進学のため英語を勉強しています。博物館学を学んだ後、帰国する予定です。また皆様にお会いできる日を楽しみにしております。

研究部会の開催予定一覧

●すでに終了したものですが、記録として掲載させていただきます。

研究部会	日 時	テ マ	場 所
ミュージアムショップ ／ソフトサービス 合同研究部会	1月31日(土) 2月1日(日)	合同研修旅行として、名古屋港水族館(1月31日)とトヨタ博物館(2月1日)において展示やミュージアムショップを見学し、博物館の運営やショップの経営についてのお話を聞きしました。	名古屋港水族館 トヨタ博物館
理論構築研究部会	2月11日(水) 14:00～16:30	「アーカイブズとミュージアムの共存～国際的視野から」と題して駿河台大学文化情報学部教授の安澤秀一先生にご講演いただきました	国立科学博物館
事業戦略研究部会	2月28日(土) 11:00～17:00	第1部「博物館経営の現場の声を聞く！」(財)目黒寄生虫館：亀外俊也館長、薄井正徳事務局長／第2部「良い博物館の条件：研究所の指導者たちはこう考える」文化総合研究所：岩城晴貞所長、丹青研究所：里見親幸本部長、文化環境研究所：高橋信裕所長	(財)目黒寄生虫館



INFORMATION

●研究紀要第2号の発行

第3回大会にあわせて研究紀要の第2号が発行されました。平成9年度会員の方には無料で1部お配りしておりますが、希望される方には1部1,500円でお分けしております(送料別)。FAX等で事務局までお申し込み下さい。郵便振替の用紙とともに郵送いたします。

●会費納入のお願い

大会(総会)をもって会計年度が改まりますので、平成10年度会費の納入をお願いします。個人会員は6,000円、学生会員は3,000円、法人会員は50,000円です。同封の払込用紙をご利用下さい。銀行振込を希望される場合や、請求書・領収書が必要な場合は、事務局までご連絡下さい。*平成9年度会費をまだ納めていない方は至急お納め下さいようお願いいたします。

●会員募集

会員名簿が更新され、平成10年2月現在で、450件の会員登録があります。学会活動の充実のためにも一人でも多くの方々に会員になっていただきたく、いろいろな機会を利用して積極的に当学会をご紹介下さいますようお願い申し上げます。入会案内書類も新しくなる予定ですので、必要な方は事務局までお問い合わせ下さい。

◆お詫び

前号(No.7)の書評のページで、T.アンブローズ著／水嶋英治訳『博物館の設計と管理運営』と、展示学研究所編『ミュージアム・ディレクトリー: vol.1 エニバーシティ・ミュージアム』の写真が入れ替わっていました。投稿いただいた方をはじめ関係者の方々に御迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

原稿募集!!

本誌は、会員の皆様がつくる会報です。
個性的かつ独創的な原稿をお寄せ下さい。

*侃々諤々：3,600字程度

書評：1,000字程度

会員からのメッセージ

個人(学生)：200字程度

法人：600字程度

JMMA会報 No.8 (vol.2 no.4)

発行日／1998年3月7日

発行／日本ミュージアム・マネジメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本／(株)ミュゼ